



TITLE:

三上義夫の生涯と業績：三上義夫による日本数学史の近代化：実証史学と文化史学の往還として (数学史の研究)

AUTHOR(S):

柏崎, 昭文

CITATION:

柏崎, 昭文. 三上義夫の生涯と業績：三上義夫による日本数学史の近代化：実証史学と文化史学の往還として (数学史の研究). 数理解析研究所講究録 2012, 1787: 138-147

ISSUE DATE:

2012-04

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/172776>

RIGHT:

三上義夫の生涯と業績——三上義夫による日本数学史の近代化——実証史学と文化史学の往還として

東京理科大学非常勤講師 柏崎昭文(KASHIWAZAKI Akihumi)
Tokyo University of Science

(本稿は大部な論考『三上義夫の生涯と業績』の梗概である。それゆえに十分に論理を展開せずに結論のみ断言することが多く、わかりにくさうことを恐れる。どうかラフ・スケッチと思われ軽く読み流すほどの御寛恕を請う。)

序

「日本数学史家」三上義夫は今まで何故に誤解され無視され続けてきたのだろうか。日本数学史の「創始者」遠藤利貞の「弟子」として後塵を拝し、日本数学史の「近代化」・「制度化」を確立したといわれる後輩たち藤原松三郎・小倉金之助に繋がる、いわば「第二走者」であり、「数学を文化として見る」奇矯な論争好きの民間学者としてののみ、三上は語られてきたきらいがある。このような日本国内の一般の評価の一方で、初期の英文著作三冊をはじめとする数十篇の英語論文により、日本国内よりはむしろ「国際的」に著名であるというように、三上にはまたたえず「国際的」の冠詞がついてまわる。さて、でははたして三上は本当に「数学を文化としてのみ見」、また本当に「国際的」だったのだろうか。それは当時の数学史界とのどのような関わりの上でのことだったのだろうか。またそれでは三上の「国際的」・「日本的」数学史「学史」における真の位置と意義とは一体何なのだろうか。

本稿は上記の疑問を下に、「Ⅰ 三上義夫の生涯」では、三上の数学史的思想を形成する土壌となった背景と境遇について述べる。「Ⅱ 三上の日本数学史における方法論の変遷」では、三上はその研究当初より近代の歴史学的方法論を持っていたのではないこと、第一に欧米の数学史家・科学史家との交遊を通して「近代のスタイル」に触れ、第二に東京帝国大学で歴史学理論を学び、第三に帝国学士院で歴史学的フィールドワークを実践したことを契機として徐々に史学実証主義を獲得していく変遷を述べる。「Ⅲ 三上の日本数学史における実践的な闘争」では、その獲得した「実証主義」を武器としての「古い日本数学史家」たちとの論争を述べる。この論争を通じて彼我の方法論の差異が明白に露呈し「日本数学史」の「近代」が顕現する。「Ⅳ 三上の日本数学史観——実証史学と文化史学の往還」では、実証主義から文化史へ、分析から総合へとの段階論を実践しつつあった三上だが、実際は実証主義も文化史も、分析も総合も同時進行していた実情とその理由、同時代の史学状況とのパラレルな相似関係を述べる。「Ⅴ 三上の「日本数学史」学史における位置と意義」は、一種三上の「非神話化」・「最適据付化」である。結局実証主義も文化史も未完成のままに終わってしまった三上の「日本数学史」学史における「国内」並びに「国際的」位置と意義、その影響を述べる。それはまたひいては近代「日本数学史」における位置と意義の考察でもある。

江戸時代の「日本数学」=「和算」をどう把握するのか。日本古来の固有「伝統」的なものなのか。中国数学を母とするのか。西洋数学の影響はあるのか。遠藤利貞ら旧和算家たちの「和算」と、和算家ではない日本の西洋数学者たちの「和算」と、西洋からみた「和算」と、数学史家たちの「和算」と、幾重にもさまざまな「和算」が輻輳し存在した時期に、まさに「和算」は三上においてこそ初めて「日本数学史」の近代的衣裳をまとった研究対象として存立したのである。「和算」は滅亡した近代初期になって初めて研究対象となったのであるが、極言すれば、三上こそが近代に「和算」を「創造」したのではないのか。というのがあまりにも極端ならば、少なくとも三上によって「和算」のイメージが確立したのではないのかと断言できるだろう。

Ⅰ 三上義夫の生涯

三上義夫は田舎の裕福な地主の次男に生まれ、生来病弱、持病を抱え、潔癖すぎる性格であった。二高を病気で二十一歳で退学、帝大は三十六歳から傍系の撰科入学、のち大学院に進むも所謂正規の順当な学歴ではなく、帝大教授にはなれなかったのである。すなわち三上は大学アカデミズム主流派としてではなく、「学閥」打倒の反骨精神を培う在野の民間数学史家として活躍せざるを得なかったのである。しかしそれゆえに三上は欧米の科学史雑誌に投稿し、英文著作を三冊も上梓し、「国際的名声」を博したことになる。新史料「我が郷里」，“Yoshio Mikami's Career”，“Yoshio Mikami's Thoughts”，「日記」の紹介を交えながら、三上の数学史観に大きく影響したと思われる境遇面の変遷を、特に、病気・学歴・職業の三点を中心に概観する。宗教忌避にはじまり、三上の生涯はまさにその環境と性格に強く規定されてきたといえるだろう。日本数学史研究最前線にあって「アカデミズム」と「民間」を行き来し苦闘する三上の生涯が、日本における「日本数学史」学史の形成過程と不思議にもパラレルな関係であることは象徴的であり、またそこに数多くの問題点が湧出する源泉ともなっている。

Ⅱ 三上の日本数学史における方法論の変遷

II-1 初期三上における錯誤——「偽史」の誘惑

三上が和算史研究を志し独学し始めた1902年から1911年9月頃までを三上初期とすると、とりわけこの時期三上は多くの錯誤を犯している。1907年9月頃に脱稿し1910年5月頃に発行の日本数学を海外に英文で紹介する“Mathematical Papers from the Far East”は内外ともに評判よろしくなかった。1908年10月に東京数学物理学会に入会し、同年11月菊池大麓に紹介され、名ばかりの帝国学士院嘱託になり、1909年から1910年にかけての半年間で英文著作二冊を脱稿する。1913年3月頃発行の“The Development of Mathematics in China and Japan”と1914年4月頃発行のD.E.Smithと共著の“A History of Japanese Mathematics”である。特に前者単独単行本は問題が多く、初版に記載された三上の事実にもとる肩書 PROFESSOR IN THE UNIVERSITY OF TOKIO をのちに菊池大麓は激しく非難したし、三上が関孝和を「日本のニュートン」とし「関はニュートンの下風に立たない」としたことによって多くの批判を招いたし、ハルステッドが三上の英文を添削したにも関わらず、慣用的でない英語がこの著の評判を落としたのである。「国際的」三上の英語力・評判はいくぶんトーンダウンせざるを得ない。また誤記も多く、偽書『上記』にも言及している。しかし何よりこの時期三上は「偽史」作家木村鷹太郎を称揚していたのである。木村鷹太郎の馬鹿げた所説を推奨したことは三上の汚点となって残っている。歴史を独学し始めたばかりの三上の歴史意識が低かったのはもちろんだが、当時の状況、人種論、西洋との対抗意識、出自をめぐる皇国意識を理解すると、何より木村鷹太郎には河上肇をはじめとて様々な学識ある人も欺かれたのだし、この初期三上にあまりに多くを期待するのは酷である。

II-2 「国際的」三上とアメリカの数学史家・科学史家たちとの交流——Halsted, Cajori, Smith and Sarton

三上は、アメリカの数学史家・科学史家たちの論文を批判する寄稿を通じて、彼らとの交流を深め、アメリカの数学史の雑誌に紹介され、その雑誌に英文論文が掲載され、英文著作を出版した。アメリカの数学史家・科学史家たちは、三上に雑誌や仲間を紹介し、英文を添削してくれる等、三上に好意的であった。日本の帝国大学に職の無い三上は、自己の研究者としてのステータスをアメリカに向けて確立しようとした一面がある。西洋東洋ともに研究者の少ない状況でこそ入り込めたといえる。それは西洋側の東洋研究の機運、東洋人研究者による本格的な東洋数学研究を俟つ状況と一致していた。しかし彼らの多くは西洋第一主義であり、関心の第一は、東洋に数学があったことを仮に譲歩して認めるにしても、それはいつ何という西洋人が伝えたかという西洋の影響を発見することであった。のちサートンによって始めて東洋の数学史が西洋人により正当に評価されるまでの道のりは長い。

彼らとの往復書翰や三上の英文著作評を紹介しながら、西洋の研究者は三上をまた「東洋数学」をなぜどのように見たのか、当時の一種の「オリエンタリズム」「ジャポニズム」「黄禍論」との関連はあるのか、三上は彼らの批判・交遊によって何を学びそれをいかに「日本数学史」に還元したのか、を考察したい。

II-3 二つの「帝国」東京帝国大学と帝国学士院——日本数学史における近代史学の導入

三上のいわば第2期である修学期、1911(明治44)年から1923(大正12)年にあたる。1911年10月東京帝国大学文科大学哲学科選科に入学し、大学院まで1919(大正8)年9月頃まで在籍し、和算史調査担当として名ばかり在籍していた帝国学士院においては1915年1月に遠藤利貞が病に臥したため、1915年以降、三上が本格的に全国の和算史調査出張にあたる、1923年12月突然解雇されるまでの時期である。

この二つの「帝国」を冠する研究「装置」で——東京帝国大学で歴史学の理論を、帝国学士院で実際のフィールドワークを本格的に学んだのである。

東京帝国大学文学部哲学科で哲学者井上哲治郎につきながらも、歴史学者三上参次・箕作元八・坪井九馬三に親炙し、数学史に先行し上位の包括する学問である歴史学をよく学び、その方法論を忠実に数学史に実践していったといえる。例えば三上による関孝和像の「脱神話化」は、児島高德抹殺等、歴史学における歴史的人物の非神話化に似る。また蛇足ながら近代歴史学の揺り戻しの「天皇」タブーは、三上の日本数学史にとっては「学閥」であったといえよう。

書誌学者長沢規矩也との論争で「書誌学とは何か」という問題が顕在化するに至らなかったのは残念だが、それは図書館の史料学とも違っていた。帝国学士院和算史調査担当として全国の墓所、碑文、位牌、過去帳、遺書、算額を取調べ、遺族を探訪し、実際に足で動くフィールドワークを実践したのも歴史学の教えである。

III 三上の日本数学史における実践的な闘争

III-1 「創始者」対「セカンドランナー」遠藤利貞-三上論争——「歴史研究法の欠如」

遠藤の『増修日本数学史』を三上が修訂したために、喧嘩をしたにせよ、遠藤の忠実な弟子としての三上像が定着している。あたかも帝国学士院で遠藤と三上は机を並べて仲良く一緒に和算史調査研究を行っていたという錯覚に陥っているのではないだろうか。三上による遠藤利貞批判の要点は、遠藤の「歴史の研究法の欠如」、つまり遠藤が近代歴史学の方法論を欠如していたところにある。つまりそれゆえに遠藤は、第一に、和算に歴史的影響を大きく与えた中国数学を無視し、第二に、史料・文献の取り扱い方、考証が雑であった。もっとも三上は、和算史創始者としての遠藤のことは充分認めているのだが。

三上の遠藤追悼文、『数学研究』誌上での遠藤-三上論争、遠藤『大日本数学史』から『増修日本数学史』に「増修」する

上でなぜか削除された遠藤の二論文「日本数学進歩一覧表」と「数学古今ノ大勢ヲ論ス」、論争の直接的契機となった宅間流円理、三上の草稿「遠藤利貞翁の和算史研究方針を評す」「(仮)遠藤氏の件につきて菊池博士への御願ひ」等を紹介しながら、「創始者神話」と「セカンドランナー」の悲哀、「和算」の「発見」・あらわれかたをめぐる近世と近代の対決を述べる。

III-2 同時代の「日本数学史家」たちとの闘い——「一種の科学史的小説の類」

20年代、30年代の科学雑誌ブームと相俟って、1928年前後は一種の「日本数学史」ブームであった。10月18日、早稲田大学理工科教授徳永康博士・関水木梢著『日本数学史』刊行。11月20日、沢田吾一『日本数学史講話』刊行。三上は両者に警鐘を鳴らす。ここでも「考証」問題が露呈する。また数学史を取扱う教育的通俗的著作への三上による批判も述べる。

III-3 「学閥」対「在野」林鶴一・三上論争——「円理」「行列式」の解釈

三上が英文で日本の数学を紹介した“Mathematical Papers from the Far East”において最も論文本数が多い(全56本中単独11本併用7本)のは林の論文であったり、ポアンカレの『科学と臆説』翻訳者としての林に対する評価等、初期においては三上は林に敬意を表している。しかし1910年10月1日に東京数学物理学会で三上論文“On the Discovery of the Circle-Principle(Reply to T.Hayashi's Remarks)”を林が代読・批判したいきさつから三上は林に不信感を抱き、論争が始まる。林は東北帝国大学に助手としての採用を三上に要請し三上を囲い込もうとするが、三上は断って東京帝国大学講師へと進む。永く続いた「円理」論争は、定義、解釈、歴史観の相違であり、同時代人・併走者でありながら、ここでも「歴史の研究法の欠如」が露呈する。林・三上往復書翰等を紹介しながら、ここにはじめて論争の全貌が明らかになる。しかし林の関孝和の「行列式」研究に刺激されて、三上が関の行列式の誤りと同時代の和算家の行列式研究を指摘できたのは幸いである。

III-4 帝国学士院岡本則録編集『和算図書目録』批判——「非科学的な杜撰」

帝国学士院において三上は、菊池大麓の死去後その庇護を失い、次の和算調査担当責任者である藤沢利喜太郎と和算調査方針をめぐる菊池の遺志を盾に対立した。藤沢は和算への「無知無理解」から、『増修日本数学史』の菊池序文を改竄命令し、帝国学士院から事実上三上を解雇・「追放」した後、杜撰な『和算図書目録』を老齢の岡本則録に作らせたのである。岡本の和算書整理の仕方と『和算図書目録』の分類法等を三上は批判する。三上の草稿「(仮)穂積陳重あるいは桜井錠二宛、藤沢氏への不満を述べる手紙草稿」「(仮)『和算図書目録』批判」を紹介しながら、ここでも「歴史の研究法の欠如」が問題点となることを述べる。

IV 実証史学と文化史学の往還——三上の日本数学史観

和算と日本人の国民性との関連、「和算史上の二大焦点」としての関孝和と安島直円、中国数学を母として生まれた和算、算木・算盤が規定する数学、中国の機械的代数学から日本の筆算式代数学へ等、三上の和算観を考察する。

三上の研究として「文化史として日本数学を見た」ことのミクロズアップされるが、三上はもっと広く中国数学史、科学史等にわたり研究している。最終目標として「文化史上より日本数学を見」るためには、まずその前に前提となる個々の緻密な研究がある。分析的考証をしなければ総合的考察もできない。いわば、分析と総合、事実と理論の両方を押し進めたのである。

V 三上の「日本数学史」学史における位置と意義

V-1 『文化史上より見たる日本の数学』は三上の「主著」か——三上の理想

1921年3月の「文化史上より見たる日本の数学」脱稿は発表を予定したものでなく、翌1922年3月からの『哲学雑誌』への投稿も穴埋めに急遽請われたものであった。だから三上には不本意に未完成のまま「思いつき」「総合」を提出してしまったという意識があり、それを追認する作業がその後の三上の研究であった。三上の研究最盛期は1930年前後である。1929年5月には国際科学史委員会地方会員に唯一の日本人として選ばれ、同年夏『支那数学史』が印刷中止になり、1930年5月来日したスミスと会い、1931年原稿三千枚ほどの『日本数学史研究』は脱稿間近であり、同年9月に日本数学物理学会常会で「関孝和の業績と京坂の算家並に支那の算法との関係及び比較」の講演をする時期である。実証主義的数学史論文の主著が続けざまに執筆されたのである。

文化史的数学史論文の「主著」「文化史上……」と1922年5月の「日本数学者の性格と国民性」が帝国学士院からの三上「追放」の主因となってしまい、1932年10月の「和算の社会的・芸術的特性について」を除き、以後三上は自己規制なのか満を持していたのか表立って文化史的数学史論文を発表していない。これは全く不思議なことではないだろうか。つまり分量的に多作であった三上のすべての発表論文の軽いエッセイや現場報告の類を除けば、99%は実証主義の論文であり、文化史的論文は1%にも満たないのである。三上「文化史」受容の仕方に「忘れられた危険な思想家」三上を「安全な」(実際は三上の「文化史」は「危険」である)「文化史」に閉じ込めておけば無難との一種国家主義的な制度維持的な意志を感じる。

当時と三上における「文化」「文化史」「道楽」「趣味」「芸」「芸術」「国民性」の語義を検討し、三上の理想と三上の受取られ方のギャップを埋め、積年の三上「文化史」にまつわる誤解を解く。

V-2 「国際的」三上のアジア的連帯——「国粹」と「国辱」

三上は、日本人・中国人・インド人に数学的能力なしとする西洋人の数学史家たち(Gino Loria, Van Hée, Kaye)のい

われなき東洋蔑視に嘯み付き、同時に彼らの中国・日本数学研究の誤謬を指摘矯正し、その当時最高形態の研究成果としての中国・日本数学を東洋人として西洋に向けて英文で紹介した。その過程でインド数学史家 Datta、中国数学史家李儼に共鳴・連帯し、史料を交換しあい、影響を与えあった。

また西洋に対抗するものとして「和算」を顕彰する戦前の風潮のなかで、「国粹」的な「和算」を研究しながら「国粹」的にならなかった、否むしろ「国辱」的になってしまった三上の特異性を、国家主義者藤沢利喜太郎や「転向」者小倉金之助と比較して述べる。

V-3 三上の「後継者＝篡奪者」としての藤原松三郎と小倉金之助——三上の影響

日本における「数学史」という近代学問の成立は、一般的にはおそらく藤原と小倉に帰すことができるとされていることだろう。藤原の内的アプローチに小倉の外的アプローチという研究方法の両極の具合に、あるいは藤原の「官学」東北帝国大学理学部数学科、小倉の「民間」科学史学会という研究「装置」の両極の具合に。しかし両者の前に内的外的アプローチともに試みていたにも関わらず、庇護さるべき研究「装置」を持たないばかりに忘れ去られていったのが三上なのである。実は三上と藤原、三上と小倉が共同で数学史研究にたずさわる機会が存在していただけに、その試みが頓挫したことはとても残念なことであり、日本数学史学界にとって大きな損害であった。抛るべき研究「装置」を持たない三上から見ると、藤原と小倉は嫉妬の対象であり、また自己の教義を篡奪して縮小再生産する後輩たちであった。

結論

第一に、三上こそが日本数学史に近代主義、すなわち実証主義史学を導入したのであり、日本数学史の「近代化」「制度化」に大きく貢献したことを主唱した。それ故に、日本数学史の「創立者」と「確立者」の称号の半ばは三上に帰せられて然るべきであろう。三上の提起した実践と方法論、「歴史の考証」、論文スタイル等の問題は、現代の「日本数学史」学界の「大学」派と「民間」派の対立、また「数学」派と「科学史」派と「教養」派の対立に未だ連綿と連繋する。その淵源はまさに三上に存在するのである。

第二に、三上における数学の「文化」「交通」等の概念は、何人も一人三上の独創ではなく、まさに史学を学んだものならば当然「数学史」にも応用さるべき「史学」の共通概念であり、三上はそれを軽々と転用したのであった。このように先行＝上位＝包含学問の「史学」の実践と方法論を、後続＝下位＝被包含学問の「日本数学史」が平行的相似的に模倣するという「学問」のありかたの格好の実践例が三上であったことを実証した。

第三に、「日本数学史」研究の欧米との同時性の共有、アジアへの波及性について言及した。「和算史」研究はひとり日本の中で細々と営まれた小さな研究分野ではなく、「和算」の「発見」「誕生」は、「国際的」眼差しの中で、さまざまな「和算」像の「闘争」の中で、その像が確立していく、そういった過程において三上の果たした役割の大きさを実証した。

「和算史」は科学史の中でも一種特殊な事情であることを考慮しなければならない。「和算」はもちろん数学ではあるが、近代西洋数学の導入採用とともに「和算」は廃絶され、現代の数学との継続関係は表面的に皆無なのである。つまり直接的に現代の数学とは繋がっていない。そこで「和算」に「遅れている数学」観を払拭する如くに遮二無二西洋数学との類似を強調する方法、あるいは西洋数学に対する先取権を主張するアプローチが存在する。また一方「もう一つの数学」として、西洋数学とは別個の体系をもったものとして、「和算」には「和算」としての独自の系統・思考方法で発達を遂げ、途中で政治的理由で廃絶されてしまった学問としてのアプローチが存在する。「和算史」はまだ若い学問である。「和算」を「発見」することがすなわち「和算」を「創造」していく批評行為だという「和算」と「和算史」が密の状況にあるのが「和算史」の形態であり、その真っ只中にいたのが「和算史家」三上義夫だったのである。

史料抜粋

I 三上義夫の生涯

「我家は数百年來の旧家、門閥を以て里人の間に尊崇せらる。我が家の郷党の間に有する勢力も亦大なり。」（『我家』『我が郷里 二』1909(明治42)7.17-8.2 甲田町教育分室所蔵 No.85101）

「南に五龍山を扣へ、北には菊山あり。西方は両山の脉によりて限られ、東は可愛川の流れて対岸と交通の便を絶ては、是れ我郷の地勢なり。古昔希臘に諸小邦の榮へたりしは、我郷に見る如き地勢によりて、山海の自ら地域を区劃したればなり。我郷の地勢は古希臘の諸邦に似たり。余は我が郷を思ふ毎に、又希臘の古昔を偲ぶ。」（『我家郷の地勢』『我が郷里 二』）

「此両山の間に横はれる上甲立は、正に我が郷里なり。日に月に此両山の偉大なる感化を及ぼしつつ、里人の思想は自然に雄大なるが中に、又謙讓の氣風を具へ、人倫の軛を脱せざらしむるものあり。一郷の氣風自ら隣郷と同じからざるものもあるも、恐くは是により。我等は之を思ふ毎に、両山の垂れたる恩恵に深謝の心あり。我が村に此両山あり。将来必ず偉人を出だすの地たるを疑はず。偉人出でて而して後、我が郷里の名大に世に現はれん。我等は期して之を待つ。」（『五龍山と菊山』『我が郷里 一』）

“I was born February 16, 1875 at the present Kōtachi-Machi, as the male heir from a infirm father, who was bed from young days.

I was very weak as a boy, and my weight was about half the usual boys. I was not expected to grow long. In my 1th year of birth I was suffered a severe illness, being not expected to recover by the physician. But I recovered to survive, although I continually suffered from eye-disease and head-ache.” 解説と拙訳「私は 1875 年 2 月 16 日に、若いときからベッドにいた虚弱な父親から男子の相続人として、現在の甲立町に生まれました。私は少年のとき大いに弱かった。また、私の体重は通常の少年のおよそ半分でした。私は、長く生きるとは予想されませんでした。生まれて 1 歳のとき、私は、内科医によって回復するとは予想されない重病にかかりました。しかし、眼痛と頭痛に連続的に苦しみましたが、私は回復し生き延びました。」(ただし太字は不明推測による。1950 年 9 月 14 日付ジョージ・サートン宛書簡内 “Yoshio Mikami's Career” ハーヴァード大学ワイドナー図書館科学史専門図書室所蔵。史料の所在御教示と複写御提供は伊藤憲二氏と佐々木力氏による。)

「今年の私の任務は大きい。科学学問の尊重を図ること、教育委員会の無謀の矯正、宗教の改革、道義心の向上、此等を主張したいが、凡ては私の国民性、民族性を基礎としての文化史の見解から説きたい。昨年末の寺での残酷な待遇に対する反抗は此主張を進めるべき第一歩となった。」(1950 年 1 月 1 日 (仮)『日記』)

「私も蒲柳の質に苦しみながら国民性を基礎にしての日本数学史を研究し、一生を通じて遂に職業にはならないのでした、郷里に帰臥してからにはたから虐待ばかりされて、今後も何うなる事か恐らくいぢめ殺される事と存じます、でも私も一生を日本数学史に捧げ国民性のことは何国へも摘用出来ますから、何らか後代までも伝えていただきたいと存じます、」(矢島祐利宛三上書簡 1950.9.25, 矢島祐利「大矢さんの思い出」1991.10.17, pp.54-55. 研究成果報告書『我が国の科学史研究の歴史と現状についての実証的研究』菊池俊彦 1992.3)

II 三上の日本数学史における方法論の変遷

II-1 初期三上における錯誤——「偽史」の誘惑

YOSHIO MIKAMI PROFESSOR IN THE UNIVERSITY OF TOKIO 「如何ニシテ此ノ如キ誤リ起リシヤ斯様ナコトハ甚タ面白カラズ又不利益ト存候」(三上義夫宛菊池大蔵書簡甲田町教育分室所蔵 No.1862)

「然るに今や日本の太古史に関して、実に驚くべき破天荒の新説を見るに至った。而も其材料は古事記などの古書より徴発し来ったもので、実に我が国史上の大発見である。未だ其発見の詳細は聞くことを得ないので、正確なることは言ひ難いけれども、其立論の基礎は徹頭徹尾真面目にして、甚だ確実のものであるやうに思はれる。即ち、我が大和民族は、元と小亜細亜に起りて、希臘に移り、一旦地中海沿岸の諸国を領有したもので、後、東漸して遂に日本の土地に來たと云うのである。」(『日本太古史に関する大発見 (一) (日本人は白哲人種なり)』『芸備日日新聞』1910(明治 43). 3. 23 水, 2 面, (1910. 3. 14), 上総大原に於て)

「大和民族は黄色人種ではなく、確かに白哲人種にして、而も誇るべき希臘羅典の諸民族と同一の系統に属し、其国語も亦希臘羅典系のものなりと云ふのである。かく聞くのみでも、実に愉快の極みではないか。此大発見は木村鷹太郎氏の熱心なる研究の結果によりて見出されたのである。」(『日本太古史に関する大発見 (二) (日本人は白哲人種なり)』『芸備日日新聞』1910(明治 43). 3. 24 木, 2 面, (1910. 3. 14), 上総大原に於て)

「紹介者は元来学者かも知れぬが、(保証は出来ないが)、此紹介の点に於ては、確かに、非学者的と云はんよりは、無学者的であつたと云ふを憚らぬ。……左様な考を抱いた瞬間だけでも、其人の頭は、学者の領分を逸して居る。自愛して貰ひたい。」(秋鹿生「最後の教書」『芸備日日新聞』1911(明治 44). 10.15 日, 1 面)

“I know very well that Mikami's work is quite unsatisfactory, and his contribution will simply be that of collecting material inaccessible to others who do not know Japanese. He has sent me two contributions late, one in which he criticized me which I intend to publish because I publish all criticisms of myself if half way well written; the other one a proof that the Japanese are descendants from the old Greek, (!) that they lived in Asia Minor and then in Greece (!), governing Italy, Greece, Asia Minor, and Egypt at prehistoric times before they went to Japan.” 拙訳「私は、三上の仕事が全く不十分なことを非常によく知っています。また、彼の貢献は日本語を知らない他の人にとって近づき難い資料を集めることだけになるでしょう。彼は私に 2 本の寄稿を遅れて送ってきました。一本はそこで彼が私を批評したもので、私は、私自身の批判をすべて公表するので、私はそれを公表するつもりです。別の寄稿は、日本人が、古代ギリシア人(!)からの子孫であり、彼らが日本へ行く有史以前の時代の前に、彼らは小アジアに住んでいて、それから、ギリシア(!)に住み、イタリア、ギリシア、小アジア、エジプトを支配したことの証明です。最良のアジア人さえ、いかに無批判的かつ非系統的であるかということは、時に驚かせます。」(1910 年 4 月 18 日付デービッド・ユージーン・スミス宛ポール・カールス書簡、コロンビア大学図書館所蔵)

“But while Dr. G. B. Halsted, who revised Mr. Mikami's former book, kept almost wholly the quaint idiom used by the author, Prof. Smith has almost entirely avoided it. I think that Prof. Smith is right.” 拙訳「しかし、G. B. ハルステッド博士が(この人は三上氏の前の本を改訂したのだが)著者によって使われる風変わりで面白い慣用語をほとんど全く保つ一方で、スミス教授はそれをほとんど完全に避けてました。私は、スミス教授が正しいと思います。」(A History of Japanese Mathematics. THE MATHEMATICAL GAZETTE. Vol. VII, No. 111, May, 1914, pp. 339-341.)

“Halsted writes interestingly but I think most Americans do not like his style and do not think much of his scholarship. You can, of course, infer this from his academic positions. Your book would doubtless have been respected more by many Americans if Halsted's note did not appear in the beginning.” 拙訳「ハルステッドは面白く書きます。しかし、私は、ほとんどのアメリカ人が彼の

スタイルが好きでなく彼の学識を重視しない、と思います。もちろん、彼の学究的な立場からこれを推論することができます。もしハルステッドの序文が最初に現われなければ、あなたの本は多くのアメリカ人によって確かにもっと尊重されていたでしょう。」(1913年2月28日付三上義夫宛GAMILLER書簡)

II-2 「国際的」三上とアメリカの数学史家・科学史家たちとの交流——Halsted, Cajori, Smith and Sarton

「私が数学史の研究に着手したのは、明治三十八年の事であった。是より先き米国の数学者ハルステッド博士と不図した事から文通上の知り合となり、同氏の勧めに依って外国へ紹介する目的で少し許り日本の数学の事を書いて見る積りで着手したが、此頃に参考の書類と云へば、故遠藤利貞翁の、「大日本数学史」(明治二十九年刊)がある許りで、而も其記事は了解し難き所多く、古い日本の算書即ち所謂和算書に就いて研究しなければならぬ事を感じた。然るに新たに蒐集しようとしても経費があるでもなく、随分苦しんだのであった。幸に岡本則録翁などの好意に依って幾多の貴重な書類を供給される事が出来て、幸にも一通りの記述を成し得たのである。」(「数学史の研究に就きて」『産経』(産経同好社)第7巻第1号,1931(昭和6).1.25, (昭和6.1.10), pp.9-10)

「余は博士の論文を読みて聊か考ふる所を記るして博士に寄せた。博士は余の反駁に見る所ありてか、之をMonistの次号に掲載するの意を通ぜられた。博士は更に其意を以て此種の事項に精通するハルステッド博士G.B.Halstedに報ぜられたと見へて、同博士の来信中にも其事が記るしてあった。事の意外なると共に、大に得意ならざるを得ぬ。」(「カールス博士の幾何学観を敬す」『数学世界』(竹貫登代多・博文館)第4巻第13号,1910(明治43).10.10, p.11(p.69).)

II-3 二つの「帝国」東京帝国大学と帝国学士院——日本数学史における近代史学の導入

「余は現在和算史の研究上に於て一二の抹殺をも試みた。而も其一つは和算の史上に於ける最も重要な部分に関してある。情に於ては其抹殺は実に忍びないけれど、従来普通に行はれつゝある説の通りに信ずるだけの理由がないから、誠に止むを得ぬ。故に余は敢て敢る反対の存することを知りつゝも、証拠不充分と云ふ判断を下さざるを得ぬ。真に涙を飲んで其判断を下すの止むを得ざるに立至つたのである。余は児島高德論に対しても、大に同感に堪へざるものがある。」(「児島高德論につきて」『芸備日日新聞』1910(明治43).7.12火(1910.7.6), 1面)

「文化史としての研究に進入したのも学閥への反抗からであり、東京の文科大学で学んだ結果である。」(「数学者の英文著述」『カレント・オブ・ザ・ワールド』(英語通信社)1950(昭和25).5.1, (昭和25.2.15), p.37)

「私は昔、坪井先生の議義の中で、歴史には動く歴史と動かぬ歴史の二つがあることを聞いた。國家の社会状態すなわち政治形態や経済形態が、その文化の発達をどのように規定するか、逆に文化の発達の程度がその國の社會状態にどのように影響するかという面から見てゆくのが動く歴史であり、その國民の変らない性質が文化の発達の上にどのように働いているかというのを見るのが動かぬ歴史であるというのである。私の科学史の研究はこれから大きな影響を受けている。私の“文化史上より見たる日本の数学”はこの二つの方面から日本の数学の発達を見ようとしたものであつた。今行われている科学史の中にはこの動く歴史の方面からだけ見たものが多いが、これだけでは見方として不十分であると思う。」(「科学史の研究についての希望」『科学史研究』(日本科学史学会)第17号,1951(昭和26).1.20, (昭和25.8.1)談話の要点を大矢眞一が筆録, p.2(p.2))

「然るに近頃人あり、歴史は事実の学問である。事実の穿鑿以外に何等の関するところもあるものでないと論じたものがある。果して正鵠に中れる適当の見解たるを得るであらうか。其見解を以てすれば、事実の闡明以外に歴史の紀事はないのである。けれども我等の見る所を以てすれば、歴史は必ずしも斯の如きみのものではない。我等は斯の如き学問を称して考証と名くる。考証の歴史に基だ大切なことは言ふまでもない。而も考証は歴史の全体ではない。歴史には更に其以上に或るものがある。普通に事実の考証及び記述をも歴史と称するけれど、そのみにて歴史の紀事全く終れりとは決して言ふことは出来ない。或は少々狭い意義であるかは知らないけれど、而も最も正確なる意義に於て真の歴史なるものは考証以上の或るものによりて始めて成立つと謂ふも取て過言ではない。其或るものとは即ち事実以上のものでなければならぬ。事実以上のものとは何ぞ。即ち事実を基礎として立論すべき歴史上の理法を探索することである。其探索こそは恐くは真に歴史と謂ふべきものである。」(「歴史と考証」『芸備日日新聞』1911(明治44).10.12木, 1面(1911.10.1))

III 三上の日本数学史における実践的な闘争

III-1 「創始者」対「セカンドランナー」遠藤利貞-三上論争——「歴史研究法の欠如」

「其上先日御邪魔申上げました時から敢なからず神経を刺激しまして今日までも引続き病床中に呻吟してゐますやうの次第で、三上先生を史料まで御訪ねすることも出来ないで居るので御坐います。和算以外にも研究したい事柄は幾らもありますけれど、和算を断念しやうと思へば、実に実に深き悲痛に沈まざるを得ませぬ。

遠藤氏が過去に大なる功勞ありしことは私も充分に認めて居ります。氏の著書は欠陥の至って多きにも拘らず、其當時のものとしては氏の(註削除部分現に採られた)如き研究法により(註削除部分であの通りに試みたのが最も適当なことであつたと私は、思ひます。)たればこそ完結したので、和算の実質とか史料の考証とかまで研究しましては、到底完成し得られなかつたに違ひありません。私は當時にありては最も適當の方針を採られたものとして推稱致します。けれども其著書の一旦出てからは事情は全く変りました。従来の雑漠なる記述的研究は茲に一段落を告げ、先生の御努力等によりて和算内容の実質的研究が開始されました。現在は尚其繼承の時代であります。更に史料の考証も必要となり、更に一步

を進めては文化史的研究も必要になったのであります。私は及ぶ限り、斯く範囲の広く又意味深きものとなった和算史の完成に努力したいと存じました。此種の意味で研究を進めてこそ始めて将来の国民生活の上に資し得べき有益なるものにもなることと私は信じます。私の此理想を実現する為めには遠藤氏の如き旧式の考へで集めた材料では非常に不便でなりません。労力とか経費とかに限りがあつて其為めに如何ともすべからざることであれば、致方もありませぬけれど、方針の誤れるが為めに不利の地に陥りつゝ之を坐視することは私には忍ばれぬことであります。私が遠藤氏と衝突せざるを得ないのは、一半は氏の性格から来て居りますけれども、又一半は此理想の相違から来たのではなからうかと思ひます。全く止さ(る)を得ないのであります。」(『(仮)遠藤氏の件につきて菊池博士への御願ひ』大正三年三月五日稿、甲田町教育分室所蔵)

Ⅲ-2 同時代の「日本数学史家」たちとの闘い——「一種の科学史的小説の類」

「水木梢と云ふ如き我々同人間に於ても未だ嘗つて其姓名すら聞いた事のないやうな新進の士の著述が、世に出ると云ふ程の勢ひが開けたのであるから、如何に機運が開けたかは充分に察せられる。」(『日本数学史論(一)』『史苑』(立教大学史学会)第3巻第1号,1929(昭和4)10.1,昭和4.6,p.62)

「私は斯の如く見たいと思ふけれども、沢田氏の説く如く妄りに想像を逞しうして、凡てを過大に見積る必要は更にないと思ふ。私は沢田翁の「日本数学史講話」を以て一種の科学史的小説の類であると見たい。決して真摯な研究の産物ではないのである。」(『日本数学史論(三)』『史苑』(立教大学史学会)第3巻第3号,1929(昭和4)12.10,昭和4.6,p.251)

「藤原某なるものの著述…或る博士が…序文」「和漢数学に関する部分は間違ひがあると云ふよりも、間違ひの中に多少は正しい事も見えて居ると云ふ方が適當であらうと思はざるを得ないのであった。」(『数学教育と数学史』『教育』(岩波書店)第1巻第4号,1933(昭和8)7.1,p.20(p.474))

「全く無条件に、毛利重能は支那へ行つた。一度に目的を得ずに帰つたので、秀吉が怒つて云々と云ふ如き事を、有り有りとして書き記すなどは、全く一種の歴史小説に過ぎない。趣味の数学史物語と云ふのは、興味本位を目的とする所の歴史小説の類で、数学史を題材に取つたものと云ふ意味のものなのであらうか。此種のものの出現には全く寒心する。」(『亀井算政』『機近珠算の研究』(珠算研究学会)第4巻第2号,1938(昭和13)2.1,昭和12.12.15,p.p.10-11)

Ⅲ-3 「学閥」対「在野」林鶴一・三上論争——「円理」「行列式」の解釈

「当大学へ御招聘致度件に付総長より直談有之候由当大学が貴下を得ることハ誠に希望する処なるも御研究の方面一転して他に向はれたる今日ハ終に御承諾御困難の由当大学に於てハ実に遺憾なるが是れ亦致し方なきことト諦むるの方無之候しかし何卒御研学の余暇を割かれても和算史の方を御捨て無之様我等其方面の後輩ハ願ふ処に有之候」(三上義夫宛林鶴一書翰,1912(明治45)1.25,甲田町教育分室所蔵No.1892.)

「先達來関勤役に関する御教示難有く存じます 今回亦「円理の発明に関する論証」の続き(『史学雑誌』御恵贈被下、詳細にして鋭利なる御觀察敬服致します。但し小生は貴下の御説が「建部の円理綴術が建部の発明にして関から伝はつたのでない」との御論證としか思はれませぬ 其の貴説は正しものと致しまして関に円理の研究なきや、ありとしてもそれはとるに足らざるものなるか、建部のに及ばずとも括要、乾坤の巻等荒木松永に直伝せしものは円理に非ざるか。小生は括要綴術丈けでも傑出せりとの見解であります。又建部の綴術に関係なくも円理と銘打つたる著書が出て居ると思ひます。此等が小生の承服の出来ぬ点であります」(三上義夫宛林鶴一書翰,1930(昭和5)12.1?,甲田町教育分室所蔵No.1952.)

「円理の発明に就ての御疑問を洩して戴きまして御嬉しく存じます。拙論の残部は十二月号『円理の発明に関する論証(四)——日本数学史上の難問題——』『史学雑誌』(史学会)第41編第12号(第494号),1930(昭和5)12.1,pp.1-58(pp.1381-1438).』で終りますから、其上で何卒充分の御批評を御願ひしたく存じます。御質疑に対して一寸御答へ申します。

第一に括要綴術は立派なものと存じます。此事は機に触れて屢々繰返し説述した積りで居ります。

第二に乾坤の巻の算法は勿論円理であります。拙論の初めにも書いて置きました。

第三に円理綴術及び円理発起には明瞭に円理と云ふ術語が見えて居りますが、括要綴術など説いたものに円理の名称を使ったものは絶無とは言ひませんが殆んど見当らないのであり、享保頃ののものには無いやうに思ひますから、享保頃には括要綴術から区別して円理の称が起きたものと見て宜いと思ひます。

第四に此の限定した意味での円理は関先生には研究がなかったと考へます。此点が私の論旨であります。

第五に荒木松永への直伝と云ふ事は単に俗説であり、事実でないと思ひます。関先生が其最高の発明を荒木にのみ伝へて建部へは伝へなかつたと云ふ如き事があつたらうとは、私は信じ得ないのであります。

要するに私の論旨は円理綴術、円理発起、乾坤の巻所載の円の算法は建部から始まつたものであり、関孝和の発明ではあるまいと云ふ事の考証でありまして、十中八九までは正しいと思ひます。さうして円理と云ふ意味の如何、括要綴術などの価値如何と云ふ如き問題は私の論旨に取りて関係はないのであります。何うか此点を充分に御了解戴きたう存じます。」(林鶴一宛三上義夫書翰下書,1930(昭和5)12.5,甲田町教育分室所蔵No.77186.)

「つまり貴下と私とは円理と云ふ意味に異同があり、又遠藤沢田等の諸先輩の円理と言つてゐられる事も貴下と同意味ではないのでありますから、其点から誤りが生じて来ました。これは短かく書く事は六ヶしいと思ひますから、雑誌上に書いてから御覧を願ひます。」(林鶴一宛三上義夫書翰下書,1930(昭和5)12-1931(昭和6)1,甲田町教育分室所蔵No.77188.)

「故に私は今改めて林博士の提議に従ひ、円理は関孝和の発明とし、「円理綴術」等の作製並に此等の書中に於ける解析方法は建部賢弘等の手に成ったものであらうと云ふ事に改訂しやう。但し私の議論は関孝和の求極限法を見落してのものではないから、円理と云ふ意味を狭く限定した場合には、私の前から採った言ひ表はし方で宜いのである。」(ただし原文は漢字カタカナ混じり文。「日本数学史概要(数学史研究ノ難事)」「高等数学研究」(東京数学研究社)第2巻第3号,1931(昭和6)3.1,昭和6.1.14,理学士,p.2)

「私共の考では今回の如き場合に貴下が私の答へを俟たずして直ちに続篇を御発表になった事は、大きな無作法でありました。私の答論は勿論予め雑誌の方の承諾を得て執筆したのでありましたが、私の寄稿後に至り、貴下からも特に急ぐと云ふ御申込であるから、同時に出すことを承諾して貰ひたいと云ふ依頼でありまして、私は徳義上では当然拒絶しても宜いので有りますけれども、万一編輯者が迷惑されるやうなことがあつては気の毒だと思ひまして承諾は致しました。併し林君の如き徳義を無視する人物に対しては何を言つても仕方がないから、都合の宜いやうにして戴きたいと云ふやうな意味の返事をしたのであります。此れは改めて申上げて置きます。

貴下の書き方が甚だ不誠意である事も、私は研究道徳上大に非難の必要ありと信じます。何れ貴下の続編に対しても評論を加へて見ませう。貴下から此続編御寄稿当時に頂戴した御手紙では、此れで最早貴下の御論旨は尽きたとの御来信でありましたが、實際あれで全然御満足なので有りませうか。此れで論旨既に尽きたりと御言ひになりますやうでは、貴下は数学史研究の要点が那邊にあるかを全く御承知ないのであります。私は東京高師で話しました時(1930(昭和5)11.22 東京高等師範学校数学会「日本数学史概要(数学史研究ノ難事)」「高等数学研究」(東京数学研究社)第2巻第2,3号,1931(昭和6)2.13.1,昭和6.1.14,pp.1-15,pp.1-14)には、林君などの如きは和算史研究の権威として人も我も許す所であるけれども、実は其研究に見るべきものなく採るに足らぬ。唯、術理の解説だけは別であると申したのでありましたが、「高等数学研究」へ書く時には此点は省きました。併し円理の御論文を見るに及んで益々此感を強う致しました事を、特に申上げて置きます。何れ貴下の御発表が歴史研究上如何に幼稚なものであるかは、此次に執筆の際に明示する事に致しませう。」(林鶴一宛三上義夫書翰下書, 1931(昭和6)3.26, 甲田町教育分室所蔵 No. 2594.)

「明治四十三年の事であったが、私が林に会つたとき、林は其所見を支持して、孫子と云ふのは敬称にして、子とは孔子、孟子など云ふのと同じく、特別の大人物でなければ言はれぬ事であるし、孫姓の人で子字を附して呼ばれる者は孫武の外にはないのであるから、「孫子算経」と云ふからには孫武を指して他に其人を求める事は出来ない。故に孫武の作と認めざるを得ぬと、頑強に主張したものである。私は固より其当時からして此の如き主張を首肯することは出来ないし、必ずしも先秦の古書と見ることも出来なかつた。……子の字が附せられて居るから、兵法家孫武に限るなど云ふ推定が出来るものではない。誠に乱暴な主張をする人も世にはをるものかと驚かされる。……」(「和漢数学史上に於ける戦乱及び軍事の関係」『算術教育』(モナス)第182号,1937(昭和12)12,昭和12.10.31,pp.4-5)

「……如何はしいと云ふよりも、余りにも無意味である。……誠に突飛な事を考へたものである。……史料の採択上に穏やかでない。……出典の記載なくして、所依は不明ではあるけれども、恐らくは単なる誤解にすぎないであらう。確実な典拠に接しない限りは、採るに足らぬものである。……林鶴一こそは全く実を忘れて空虚の議論を試みて居るのである。」(「豊島正美事蹟次」『算術教育』(モナス)第193号,1938(昭和13)11,p.3,p.6,p.7,p.20)

「自分の眼で見、自分の頭で考へるとは主観的に考へるとの意に思はれ、文科的事も理科的事と同じであることを宝石とすると云ふが、私の眼からは林鶴一博士と論争したのは、主として数学の研究法と歴史の研究法と同じくないことに基つてゐる。藤原博士も此と同じ誤りを犯してゐる。林博士も藤原博士も数学者であるから数学上から西洋の方法と対比したものなどは、数学の労力の不足な我々よりも得る所の多いのは当然で此れには感謝の外はない。藤原博士は経費が多いのと、大学での事で便宜も多く、我々よりも都合はよいが研究方法の異同で私が論じたやうな事にも及ぶ。識者の批判を願ひたい。」(「我が歴史の研究」『史学研究』(広島史学研究会)第5集第43号,1951.3,p.88-89)

III-4 帝国学士院岡本則録編集『和算図書目録』批判——「非科学的な杜撰」

IV 三上の日本数学史観——実証史学と文化史学の往還

「分析と総合とは何時も必ず相俟って進む事を要するものであり、此両者が共に整頓して始めて歴史の真相が明らかにされる。」(ただし原文は漢字カタカナ混じり文。「東西数学史」戦近高等数学講座(共立社)第1巻,1928(昭和3)4.15, p.1)

「一々の考証をも仔細に列挙して説いていないと、容易に人の信用を求めることも出来ないし、又所説に就いて問題の起る場合に、其準拠が判然しない、取ることも捨てる事も出来ないと云ふやうな事があるのも稀ではない。何うしても細かい所まで説述記載して貰はないと、後に手数をかける事が屢々起きるのである。故に細密の点までの用意深き研究と、要を摘まんでの大体一般の観察とは両々相俟って進行しなければならないやうに主張したい。」(「富士川先生の回顧」『日本医史学雑誌』(日本医史学会)第1290号,1941(昭和16)4.28,p.156)

「数学史の爲めには私は年来多少の努力を費やした積りである。数学史の能事は過去の遺物としての数学の来歴を明らかにするだけで終始するものであるならば、私に取つて斯の如き歴史は畢竟無用の長物である。生命なき過去の事蹟の単なる分析は好事者の閑事業に過ぎない。私は過去を明らかにする事に依りて現在を理解し、且つ将来に向つて進む爲めの指針になるべき事を思ひ、其理想を実現するのが希望であつた。過去の業績若くは発達の状態を通じて将来に活躍すべき、

活きた血液の循環する所の歴史を作りたいのであった。是に於て其研究方法としては、文化発展の一部としての数学史を闡明しなければならぬこととなった。其目的に於ては将来の教育上に役立つべき業績を造り出すことであった。我が恩師で教育学の大家である文学博士吉田熊次氏に此事を語ったとき、先生は其成功を希望し、其努力を祝福する旨を告げられたことがあった。私の努力は常に此目的の為に著々として進んで居ることを告白する。私は斯の如く思ふ。けれども固より事実の闡明を無用視するのではない。事実を正確に知らないでは、活きた歴史は作られない。」(ただし原文は漢字カタカナ混じり文。「数学史叢話」晩近初等数学講座(共立社)第1巻、1929(昭和4)4.25, pp.1-2)

V 三上の「日本数学史」学史における位置と意義

V-1 『文化史上より見たる日本の数学』は三上の「主著」か——三上の理想

「私の研究態度は大体からいふと和算の問題や方法が変遷した経過を記述するのが目的ではないのであって、私は文化史的乃至社会学的若くは社会誌的に見て行きたいのである。」「此種の態度から研究することは一見容易なやうであつて、実は和算の実質や和算家の事蹟など一通り知悉した上でなければ出来ないものであつて、単に和算の問題や方法の変遷を取り扱ふよりもずっと六ヶしいのである。」「(和算史研究の成果(遺稿)『科学史研究』(日本科学史学会)第19号、1951(昭和26)8.20(大正12.8 起草)p.38)

「和算史は何うしても文化史の一部として研究を進めなければならない。和算の発達が日本の国民性若くは日本文化の性質に如何なる関係を有するかを確め、之によりて将来の数学教授を如何にすれば日本人に最も適当な施設が出来るかの参照になり得るやうな数学史を作ることが出来ないでは、数学史の研究は意味を成さない。」「(第三回総会ニ陳列セル和算書解題『日本中等教育数学会雑誌』(日本中等教育数学会)第4巻第1号、1922(大正11)、(総会1921(大正10)7.30-31), p.33. ただし原文は漢字カタカナ混じり文。)

V-2 「国際的」三上のアジア的連帯——「国粹」と「国辱」

「是レハ友人李儼君ノ通知ニ依リテ知り得タコトヲ感謝スル。」「(梁上三珠の算盤『えっくす・わい』(XY社)第18巻第7号、1921(大正10)9.1p.2)

「印度の数学史に就ても近年研究が次第に進むやうであるが、先きごろ、カルカッタ大学教授ダッタ氏が印度と支那との関係を述べて居る中に、二十年前の私の旧著を参照してゐるので、近頃私自身も亦支那の数学史家の研究も段々進んでゐるから、旧著の不精確であつたのが愧かしいと云ふやうな事を申送つたのであつた。」「(『数学史の研究に就きて(承前)』(編輯(編輯同族社)第7巻第3号、1931(昭和6)3.25, (昭和6.1.10) p.18)

「Kaye氏の見解は恰も支那の数学に就て白耳義人 Van Hée氏が何等天賦の能力ある事を認められないと論じて居るのと同じく、軽々しく信ずる事が出来ない。Kaye君の議論は印度の幾何学が立派なものでない事が、一つの論拠になつてゐる。」「(ただし原文は漢字カタカナ混じり文。「東西数学史」晩近高等数学講座(共立社)第5巻、1928(昭和3)8.15, p.162.)

「然るに祖冲之の算法に就ては、西洋人などの中には希臘の Archimedes などの創意した算法と関係が有りはせぬかと云ふ人も有ります。伊太利人の Gino Loria 博士などが、それで有ります。博士はゼノア大学の教授にして、曲線論の大著も有りますし、希臘の数学史に就ては有力な大家で有ります。希臘数学史の研究家は幾人もありますが、其中でも英國の Sir Thomas Heath 氏の如きは最も優れた人物でありませうが、それに強いので大家で有ります。さう云ふ有力家の所説で有りますから、十分に尊重しなければならぬので有りますが、何うも充分に感服する事が出来ない。何故かと言ひますと、支那の数学に就ては充分な知識がない。如何なる性質の算法で有るかも明らかでないもので有ります。さうして支那人に数学上の能力はないものと初めから決めてかゝりまして、支那人には出来さうもないから、希臘からでも伝へたのであらうと云ふやうに見て居るのであります。如何に篤学な大家の見解で有りますと、さう云ふ態度での議論は余り穩かなものでないと思ひます。其結論が果して首肯すべきでありや否やは、別の問題としまして、議論の態度が感服し得られない。さう云ふ論法は確かに誤つて居ると思ひます。自らの専門の研究では根本史料に基づいて綿密に調査した上でないと結論を立てる事もしないと云ふ慎重な人でも、専門外の事に関して議論をする場合には、皮相的な僅か許りの論拠からして重大な結論を無造作に試みると云ふやうな事が屢々有り勝のやうに思ひます。」「(堀野宗巴と関孝和の数学並に科学史の一般考察(承前)『中外医事新報』(日本医史学会)第1139号、1928(昭和3)9.28(昭和2.12.12 日本医史学会第2回例会講演)p.458)

「白耳義の教父ルイ・ワネーは長く支那に滞在して、支那の数学を研究し、彼国では相当に名を知られた人であるが、支那人は数学の能力を神から賦与されて居らぬと説いたことが有る。此見解の如きも固より半面の真実性を有するであらう。けれどもワネーが「隋書」律歴志の祖冲之「綴術」の記事を以て、明末に西学の伝へられてから以後に於て、支那の学者の偽愛国心の為めに捏造された虚構のものであるとしたのは、決して正しくない。「隋書」の古刻本の存在に依つて、容易に之を立証することが出来る。ワネーの所説は全面的に正鵠を得たものでは無いのである。支那には明らかに有力な創意もあるし、又他国に類例を見ざる特色もあつて、特殊固有の歴史を構成することは否まれぬ。只、其歴史の長久にして、大きな文化の中に育まれながら、比較的珍奇の業績に乏しく、僅かに断続して進歩発達を遺したと云ふのみに過ぎないのが、如何にも残念である。是に於てワネーの如き見解を見ることになるのも、止むを得ないかも知れないが、併し実際に於ては相当に数学上に創意独創の能力を発揮したものであり、其進歩の順潮に継続し得なかつたのが、大なる発展を齎らすことにならなかつた真因であり、能力の如何を云々すべきものではない。ワネーの如く根本の真相を観望し得ざる歴史の作物は、畢竟徒勞である。」「(支那思想・科学(数学)岩波講座(岩波書店)東洋思潮[東洋思想の展開]第3巻、1934(昭和9)9.15p.3)

V-3 三上の「後継者＝篡奪者」としての藤原松三郎と小倉金之助——三上の影響

「藤原博士自身の『余の和算史研究』があるが私は首肯し得ない。此の事は『科学史研究』に書き送ってある。関と建部で七分、久留島と安島で各一分、残りの一部を他の諸算家がしたと云ふのは、教授上の試験採点の風を適用したものであらう。……菊池博士と藤沢博士を対等に見たのも誤りであり、証拠のないことは一切信ぜぬと云ふが此れは明かに証拠のないことを信じたのである。自分の眼で見、自分の頭で考へるとは主観的に考へるとの意に思はれ、文科的の事も理科的の事と同じであることを宝石とすると云ふが、私の眼からは林鶴一博士と論争したのは、主として数学の研究法と歴史の研究法と同じくないことに基ついてゐる。藤原博士も此と同じ誤りを犯してゐる。林博士も藤原博士も数学者であるから数学上から西洋の方法と対比したものなどは、数学の労力の不足な我々よりも得る所の多いのは当然で此れには感謝の外はない。藤原博士は経費が多いのと、大学での事で便宜も多く、我々よりも都合はよいが研究方法の異同で私が論じたやうな事にも及ぶ。識者の批判を願ひたい。」（『我が歴史の研究』『史学研究』（広島史学研究会）第5集第43号1951.3 pp.88-89）

“There is a scheme among the members of the Japanese association for the history of science to recommend Dr. Kinnosuke Ogura to become a member of the International Academy for the history of science, I being a and only member of the Academy. But I have refused it, because I don't like a materialist, a materialistic retainer of the historical view or a Marchisist. We on while I am informed that Professor Yajima of the Association was suddenly permitted to attend to the Amsterdam meeting by air flight. I hope I may recommend him instead.” 解説と拙訳「私がその学会のただ一人のメンバーですが、科学史国際学会の一員になるために小倉金之助博士を推薦するという、科学史日本会議のメンバーの間に計画があります。しかし、私は物質主義者、歴史的見解の物質主義的下僕あるいはマルキストが好きでないで、それを拒絶しました。……同時に、学会の矢島教授が航空便でアムステルダム会議に出席することを急に許されたことを私は通知されました。私は、彼を代わりに推薦してもよいことを望みます。」（1950年9月14日付ジョージ・サートン宛書翰, *ibid.*）